

1. 景気動向

D I 値（好転とした数から悪化と回答した数を引いた値）は、依然として全業種においてマイナスで推移しているが、マイナスポイントは前回調査（4～6月期）に比べて、製造業の横這い以外の業種ではわずかながらもマイナス数値は減少しており、景況の悪化は底をついた兆しが若干見受けられる。また、「経営上の問題点」の上位に新たな課題が上位になっている点が浮き彫りになっている。

		建設業		製造業		卸売業		小売業		サービス業	
		7～9月	10～12月	7～9月	10～12月	7～9月	10～12月	7～9月	10～12月	7～9月	10～12月
		今期状況	見通し	今期状況	見通し	今期状況	見通し	今期状況	見通し	今期状況	見通し
売上高		 17	 22	 28	 27	 17	 17	 36	 25	 40	 38
採算		 39	 48	 29	 29	 33	 42	 42	 39	 24	 32
資金繰り		 32	 27	 25	 23	 33	 33	 48	 39	 16	 20
業況		 18	 22	 30	 21	 33	 33	 39	 34	 29	 25
経営上の 当面する 問題点	1位	請負単価の低下・上昇難		需要の停滞		需要の停滞		需要の停滞		需要の停滞	
	2位	官公需要の停滞		製品(加工)単価の低下・上昇難		仕入単価の上昇		購買力の他地域への流出		新規参入企業の増加	
	3位	民間需要の停滞		取引条件の悪化		販売単価の低下・上昇難		大型店・中型店の進出による競争の激化		利用料金の低下・上昇難	
業種別 コメント		前期に比べて、マイナス値はかなり減少していることが大きな特徴となっているが、「官民の需要の停滞」が数年当面の問題点となっていたが、今回始めて「請負単価の低下・上昇難」がトップになった。水害等による緊急受注があったこと一つの要因と思われるが、数値からも、民間需要もわずかながら上昇しているとの回答企業も見られ、厳しい経営環境は続くと思われるが、来期に向けて期待を寄せていることが窺えられる。		前回調査でマイナスD I 値がやや減少し、長年続いた不況も底をついたような業況であったが、今回調査でもほぼ前回と同様の結果となった。しかしながら、業種間・企業間での格差は依然大きく、製造業全体が好転に向かっているとは言えない状況であると言える。課題として「取引条件の悪化」が上位になっており、大きな要因として「原材料仕入単価の上昇」がネックとなっており、引き続き大幅な売上増が見込めない中で、厳しい経営環境が続くものと予想される。		売上高に関して今期改善傾向が見られたが、採算面ではマイナス結果となった。あわせて経営上の当面の問題点に前期では見られなかった「仕入れ単価の上昇」が入ってきたことなどから企業間競争の激化が進んでいる事が見て取れる。また採算面のマイナスは資金繰りを圧迫し、資金繰りは前期同様、改善傾向は見られなかった。業界全体での競争意識の高揚により、悪いながらも業況、売上は改善傾向を示してきているが、利幅のない低価格競争の雰囲気も見て取れ、今後は他社との差別化をどれだけ図れるかが企業の課題である。		猛暑やアテネ五輪などの影響も有り、ボーナス及び中元商戦に追い風があり、売上及び採算面で大幅な改善が見られた。来期の見通しとしては、クリスマス、年末商戦へと入る中、個人消費に明るさが見られるものの雇用、所得関係の厳しい傾向により、大きな期待はできない。魅力ある店づくり、品揃えが今後の課題と思われる。		季節的な要因も手伝って全体的に改善傾向に推移しており、個人消費に明るい兆しが見え始めている。しかし、集中豪雨の影響もあり、飲食関係では低調な動きが伺えるが、個人消費の改善傾向も手伝って、来期の見通しへの期待感が伺える。	

*表中の天気図はD・Iを以下のように分類したものです。

				
とくに好調 (50 DI)	好調 (25 DI<50)	まあまあ (0 DI<25)	不振 (25 DI<0)	きわめて不振 (DI<25)

当所では分析にあたってD・I（好転したとする企業割合から悪化したとする企業割合を差し引いた値）を採用しました。